

ロシア文化における「こころ」の概念

——言語文化学的分析

S.E. ヤーチン С.Е. Ячин

(国立極東技術大学文化人類学部部长、教授、哲学博士)

S.Yu. マルコワ С.Ю. Малкова

(国立極東技術大学文化理論及び歴史科助教授、哲学博士)

翻訳: 上世博及 Hirochika Kamidze

(東京ノーヴィ・レバトリシアター)

1 問題の所在

この論考の目的は、ロシア文化はこころという概念にどのような意味を込めているか、そしてそれがロシア民族の自覚にとってどのような意義を持つのかを明らかにすることである。この論考は日本の読者向けが前提となっており、これを書くにあたり2つの背景がある。第1に、筆者は、さまざまな日露間のイベント(会議、文化プロジェクトなど)に参加し、日本とロシアの文化の間にはある独特の相補性が存在しているということを目の当たりにした人物であるということ。日本の読者はロシア古典文学(ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ)に興味を示し、ロシアの大衆は日本文学や日本文化全般に興味を示していることがその相補性の証拠となる。第2に、ロシア文化同様、日本文化においても心の概念が中心的位置の1つを占



大学中央入口

め、2つの民族の世界観の類似性を証明していること。それとともに相違点も存在している。我々としてはこの論考が、我々が提示する方法を使い、日本文化におけるこころの概念という同じようなテーマでの日本人の研究論文がロシア語に翻訳されることに繋がってくれることを願うものである。

ここ10年、ロシアでは人文科学的研究分野において言語文化学的アプローチを利用することへの関心が著しく高まっている。この言語文化学的方法論の基本的仮定は、言語は文化の核であるということから成り立っている。このアプローチの基本は「言語を《民族精神》として認識する」というW. フンボルトの教えに遡る。フンボルト理論によれば、世界の像は母国語の影響によって形成される。だからこそのいろいろな民族文化が、概念化のためのさまざまな道具を利用しながら、世の中の多様な言語的絵画(表象、見本)を創りだしているのである。この言語の解釈は、M. ミュラーによって、さらにはネオフンボルト派の理論や、E. サビアとB. ウォーフの言語的相対論において発展する。

言語文化学的アプローチは(1)言語利用の特徴、その言語の文法的、構文的、文体的特性によって文化を全体的に判断することができる。(2)言語そのものが民族の意識を形成する。この2つを前提としている。

ロシア文化を認識するためにこころの概念を選んだのは偶然ではない。ロシア文化では、ロシア人の性格はこころが広いことだという自己認識がもはや伝統となっている。このことについては多くの作家や哲学者たちが語っている。同様に自分たちを〈素朴な〉民族の代表だとも思っている。

どの民族でも、どの文化においても、こころは感情と体験の中心点と

して現れる。これは、こころはどんな人間でも強い体験をしたときに感じ、聞くことのできる身体器官でもあることに関係する。だから多くの文化がこころの状態を特徴づけることを通じて感情的な状態を表現しているのは驚くべきことではない。にもかかわらず、異なる文化のあいだでは体験を通じた人間の心理に関する解釈があまりにかけ離れすぎているということがある。

2 ロシア語における「こころ(сердце; serdtse)」の語の言語文化学的分析

ロシア語における「こころ(сердце; serdtse)」という言葉の語源は中心性、「まん中の(серединность; seredinnost')」である。もし形式的にこの言葉の一般的な意味を決めるとすれば、生命の中心点という意味になるであろう。この一般的な意味はメタファーと連想の3つの分野を通して明らかになる。(1)魂の同義語として、(2)願望の貯蔵庫として、(3)感覚器官と体験として、ロシア語におけるこころという言葉に伴った表現と慣用句を紹介しよう。

(1) 魂の同義語としてのこころ

こころ(сердце; serdtse)という言葉はカッコ内の魂(душа; dusha)という言葉に置き換えても、ロシア語を話す人にとっては表現の意味は変わらない。

*訳者注: 紙面の都合上、代表的な慣用句だけロシア語の原文を掲載する。

- こころ(魂)の底で В глубине сердца(души); V glubine serdtsa (dushi) ——内心、ひそかに、無意識に。
- こころ(魂)の奥まで До глубины сердца(души); Do glubiny serdtsa (dushi) ——非常に強く(心配する、ゆり動かす、驚く等)。



大学文化センター

- こころ(魂)から引き抜く——誰かを、あるいは何かを無理やりまったく忘れる。
- すべてのこころ(魂)から От всего сердца(от всей души); Ot vsego serdtsa (ot vsei dushi) ——まったく誠実に、完全にあげつろげに、率直に。
- こころ(魂)が一杯となって——感極まって。
- こころ(魂)が悲惨な地獄——辛く苦しい。
- こころ(魂)をつかむ——ひどく、深く興奮させる、感動させる、心配させる; 締め付けるような郷愁、痛みを呼び起こす、喜ばせる、感動。
- こころ(魂)に入る——誰かに深く愛されるようになる、深い愛着の感情を呼び起こす。
- こころ(魂)を覗き込む——誰かの秘密の考え、感情を分かろうとする。
- こころ(魂)の上の石——辛く、重苦しい感情を味わう。
- こころ(魂)から石が落ちる——安堵感を味わう、陰鬱な、重苦しい、不快なものからの解放。
- こころ(魂)に忍び込む——気付かないうちに、徐々に、無意識に現れ

- る、生じる。感情、思考について。
- 猫がこころ(魂)を引っ搔く——憂鬱、落ち着かない、心配だ。
- こころ(魂)を破く——こころの悩みや苦しみを引き起こす。
- こころ(魂)が痛い Сердце болит(душа); Serdtse bolit (dusha) ——不安、心配、こころの苦しみを味わう。他人のことで不安になる、苦しむ、心配する。ものごとで不安を覚える。
- こころ(魂)が破れる——こころの苦しむ、憂鬱感、悲哀感を味わう。
- こころ(魂)がない——人、あるいはものに対し興味、好意、願望、同情、信頼がない。
- こころ(魂)が場所がない——気もそぞろである、落ち着かない。
- こころ(魂)がひっくり返る——憐憫、同情のはげしい感情を味わう。
- こころ(魂)がバラバラに裂かれる——何かに深い悲しみ、悲嘆をおぼえ、辛く感じる。
- こころ(魂)をこする——陰鬱、寂しい、不安、心配になる。
- こころ(魂)を読む——誰かの考え、願望、気分を推量する。
- こころ(魂)をわずらう——不安を

味わう、心配する、苦しむ。他人のことで不安になる、苦しむ、心配する。ものごとで不安を覚える。

- すべてのこころ(魂)で **Всем сердцем (душой)**; **Vsem serdtsem (dushoi)** ——かぎりなく、無限に、誠実に、熱烈に。ひじょうに強く(望む、目指す、期待する。)
- こころ(魂)で休む——気晴らしをする。
- こころ(魂)によらない——気に入らない。

(2) 願望の貯蔵庫としてのこころ

- こころの庇護者——(おどけた表現)女性にもて、女性の成功を利用する男性。
- こころ(手)を渡す——誰かの妻になることを承諾する。
- こころを開く **Открывать сердце**; **Otkryivat' serdtse** ——愛を告白する。秘密の考え、悩み、感情を打ち明けて話す。
- こころに落ちる——生じる、現れる、気に入る、恋する。
- こころを魅了する——自分への愛を吹き込む、自分を好きになるよう仕向ける。
- こころへの通路を見つける——誰かの好意、愛情、共感を得る、引き起こす。

(3) 感覚器官、体験としてのこころ

- こころから離れる——突然不安の状態、不幸、災難の予感が生じる。
- こころを止めながら——強い不安や動揺を味わいながら。
- こころが落ちる(離れる、転落する)——不安、恐怖をあげわう。絶望する。動揺や驚愕を突然感じる。
- 重いこころで——落胆した状態で、不安な中で、悪いことを予感しながら。(反義語:軽いこころで)
- やわらかいこころで——何の不安もなく、何の心配もなく。
- 大きなこころ **Большое сердце**;

Bol' shoe serdtse——熱烈に強く感じることのできる人、思いやりのある、善良な人。

- こころに手を置く——まったく純粹なこころで、誠実に、真摯に(話す、答える)。
- こころが苔で覆われる——こころなく、無感情で、冷淡になる。
- 開いたこころ(魂)で **Открытым сердцем (душой)**; **S otkryityim serdtsem (dusyoi)** ——偏見なく;真摯に、信頼して、正直に。
- こころ(魂)から石が落ちる——安堵感を味わう、陰鬱な、重苦しい、不快なものからの解放。
- こころの血で書く——誠心誠意を込めて、深い感情を込めて、説得力を持って、追体験しながら、苦しみぬいて書かれたもの。
- こころから消える——ホッとす、落ち着く。
- 純粹なこころから **От чистого сердца**; **Ot chistogo serdtsa**——まったく真摯に、純朴に、善意に駆られて。
- こころの中で——憤慨、苛立ちがつつて。
- こころに留める——怒る、憤慨する、侮辱、悪意を抱く。
- こころの中にナイフ——こころの痛み、苦しみの原因となる。
- こころ(頭、魂)が燃える——非常に興奮する、興奮した状態になる。
- こころが血を浴びる——こころの痛み、同情心、憐れみ、締め付けるような郷愁で耐え切れないほど辛くなる。
- こころが離れる——心配しなくなる、いらつかなくなる、落ち着く。こころを固めながら——いやいやながら、自分に無理をして、意に反して。
- こころを引き剥がす——誰かに、あるいは何かに自分の怒り、苛立ちを当り散らす。
- こころで **Сердцем**; **Sserdtsem**

——憤慨して、怒って(何かを言う、あるいはする)。

- しょげたこころで——恐怖、驚愕を味わってたじろいで。
- 純粹なこころで——まったく率直で、信用性のある誠意。
- こころに自由を与える——自分に深い感動を味わせる。
- こころに油を塗るように——非常に気持ちよく、大きな満足、快感を得る。
- こころの近くで受け容れる——非常に大きな意味を付けながら、高揚した感情をもって何かを受け容れる;何かを身をもって知る、大きな関心を持って何かに接する。

慣用句の大半はこころと体験の関係を示していることに気づくだろう。

さらに、結果的にロシア民族の性格、精神性、そして文化を理解するのに決定的となるもう1つの側面があることも見逃せない。それは独特の両義的価値、あるいは不調和な性格である。

この両義的価値はロシア語の「こころ(**сердце**; **serdtse**)」という言葉の意味の中に現れるが、おそらく日本語の「こころ; **kokoro**」という言葉の意味には含まれないと思われる。「こころ(**сердце**; **serdtse**)」という言葉は「怒る(**сердится**; **serditsa**)」という言葉と同じ語源である。先に挙げた慣用句のいくつかはこの意味が直接見てとれ(例:こころの中で、こころに留める、ほか)、他のものは間接的に見てとれる。そして慣用句である以上、肯定的(善い)感情の可能性もあれば、否定的な感情の場合もあるわけである。このようにして、ロシア語におけるこころの概念の言語文化学的分析は、この概念の特徴の中心となる意義は反義語の関係である、という結論に我々を導くので

ある。たとえば、「こころのこもった(**сердечный**; **serdechnyi**)」—「怒る(**сердится**; **serditsa**)」↓「こころのこもった(**сердечный**; **serdechnyi**)」の基本的な意味は人の性格の一般的な定義として「親切的な」である。「怒る(**сердится**; **serditsa**)」(動詞)あるいは「怒った(**сердитый**; **serdityi**)」(形容詞)の基本的な意味は、不満を感情的に表現しながら、たとえば、罵りながら、その不満を抱くことである。「怒って」というのは、悪意のあるという意味ではない。人は、その人がそうあるべきと思っていることと一致しないものを見たときに怒る、と我々は理解している。つまり、こころの概念においても、怒ることにおいても、人間の内面世界、主観性、体験は生命の活力の源であるということが示されているのである。

実際、他の方法による研究でも、この事実は論証される。この事実はロシア的性格にとって独特で、ある特殊な気分の不安定さを特徴づけるのである。人間の気分(感情的な状態だけでなく、思考の方向や、積極的行動の性格も含めて)には2つのおおまかな要因がある。それは内面の状態と外的な環境である。内面の状態への我々の依存は(ロシア語での「気分(気) **настроение** ; **nastroenie**」という言葉は「内側の傾向 **внутренний настрой** ; **vnutrennii nastroi**」という意味)我々自身が判断する限り、他の文化よりもはるかに顕著にみられる。「気がないから」という理由で、人が何かをするのを諦めてしまうという状況は典型的だ。あるいは、たとえば、誰かが乱暴な言葉や行動で他人を侮辱すると、「わたしの気に触ったから」という理由をつける。(日本人の性格からすればそんな「理由」はあり得ないのではないかと思う。)しかし、逆に「気がある」ときは、その

気分が特発的な積極性、熱意、私心のなさとなって現れる。

3 結論

これまで示してきたロシア的性格の両義的価値はMMPI(ミネソタ多面人格目録)*の方法による研究でも明らかである(Dablstrom W. Welsb Y., An MMPI Handbook. Minneapolis, 1975)。当初、この目録は人格偏差(特徴づけ)の定義のために精神医学において使用されていたが、今日ではクロスカルチャー的な研究において使用されることの方が多い。同時に、さまざまな群あるいはグループから得られる平均指数にも用いられる。このように移行したのは、多くの現場の精神科医たちが、民族全体はその民族の中でもっとも頻繁に見られる強調された人格の型で表せると主張し、研究して得た考察に基づく。この目録はある群におけるなんらかの人格の特徴を表し、定義づける。それぞれの特徴には1つ、あるいはいくつかの尺度が適応される。(この尺度は400以上あるが、広く使われているのは約50である。)ある性格のなんらかの特徴の表し方は、できるだけ相関関係のある得点数で決められる。結果的に、質問が人格の横顔となるのである。

いま我々の手元にあるのはアメリカ人とロシア人の質問の比較だけである(カシヤノワ K. ロシアの国民性について。- M. J., 2003)。項目における性格の特徴としては **E m**——感情的脆弱性尺度(最高得点数48)と **E p**——癲癇尺度(最高得点数56)が適応されている。アメリカ人はこれらの尺度で約12点となっているのに対し、ロシア人は約20点。尺度による差異は13%である。

この目録は我々のこころの別の特徴を証明することになる。それは生命の中心点としてのこころとの関係

である。MMPIではこの特徴を抑圧と名づけている。抑圧の概念とは、人間が意識にいっつかの心理状態を押し込めまいようにし、意欲を与えるように努め、心理については考えないように努力している状況であると説明している。この尺度においてはロシア人が20点(40点中)なのに対し、アメリカ人は11点である。ロシア人にとってのこの特徴は次のように解釈できるかもしれない。人のこころの上にあること、つまり人が身をもって体験していることは、多くの場合、意識や知性のレベルでは計り知れないことである。この場合、アメリカ人と比べるとロシア人のメンタリティは、身を持った体験と知性(意識)の間にはるかに大きな違いを設定しているのだ。

ここでロシアと日本の文化におけるこころの概念の重要な違いを発見できるように思う。もし日本文化では「こころ; **kokoro**」に知性という意味が含まれるとしたら、ロシア文化では「こころ(**сердце**; **serdtse**)」は知性を除外する。正確にはロシアのメンタリティはこころへの知性の従属を求めるのである。これはロシア正教会のある非常に重要な禁欲生活の規律(祈祷の規律)から来ている。そこには「こころに知性を積み込め」とある。一般的にロシア文化においてはこころに従って生きるほうが、知性に従って生きるよりも価値があるとみなされるのだ。ロシアの政治的キャンペーンでは、知性ではなくこころへの呼びかけが頻繁に利用される。大統領選挙の際、エリツィン候補に注目が集まった呼びかけがもっとも特徴的な例だろう。プラカードにはこう書かれていたのだ、「こころで選べ!」と。

現在の言語文化学と人格目録を哲学的な人間の概念(哲学者人類学)という枠の中に置いてみようと思う。人

間の哲学的概念はメタファーの論拠では利用できない。ではこころの概念は……、これもやはりメタファーであり、つまり一方から他方へ文字通りの意味の移行になる。哲学において、こころのメタファーのすべての内包的意味に当てはまる概念は主観性である。つまり、分類的な表現をすると、ロシア文化の特性は外的生活(客観性)よりも内的生活(主観性)の方に比較的大きな立場を置いているということだ。主観性は知性(思考)との関係を条件づける。哲学的な立場からすると、思考は外界で人間を

方向づける能力でもあり、人間の客観性を運命づけるものでもある。

以上をまとめると、現在の言語文化学は、ロシア文化においては何かに対して主観的な関係を伝えなければならぬすべての状況でこころの概念が使われていることを証明している。しかもこの概念が分かりやすく使われている。重要なものごとについて話す場合、ロシア人は必ずそのことに対する主観的な関係を話し、その際この言葉(こころ)を伴う慣用語を用いるのである。

* MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory: ミネソタ多面人格目録) は精神医学的診断の客観化を目的として、マッキンレー, J.C. とハサウェイ, S.R. により開発された質問紙法の1つ。550項目の質問からなり、10の臨床尺度だけでなく、被検者の回答態度を測定する妥当性尺度(虚偽尺度など)も含まれる。質問数の多さ、尺度の詳細性において信頼性が高いパーソナリティ検査の1つであり、あらゆる臨床場面で用いられている。しかし質問数が多いため、検査に時間がかかるのが短所である。



ウラジオ風景



S.E. ヤーチン教授

【執筆者紹介】

本論文の執筆者、セルゲイ・エフゲニエヴィチ・ヤーチン国立極東技術大学教授(文化人類学部長、ロシア・ウラジオストック)は、1951年、ソビエト連邦(現ロシア共和国連邦)沿海州リポフツィ村に生まれ、ベテルブルグの大学で哲学を修め、哲学博士号(PhD)を取得。専攻分野は文化哲学で、特に、社会的認識と哲学的人類学の研究法や人間についての哲学的認識の問題を専門とし、70篇以上の哲学論文を学会誌などに発表している。主な論文には、「意識活動の構造における思考概念」、「意識的生活の現象化」などがある。

最近、モスクワやベテルブルグやウラジオストックの知識人や文化人と連携して、メタ・カルチャー研究会などを組織し、ウラジオストックを拠点に精力的な研究活動を推進している。昨年8月のソウル大学で開催された「世界哲学会議」では、「文化哲学」部門で研究発表している。ちなみに紹介者(鎌田)は「仏教哲学部門」で研究発表した。

現在、国立極東技術大学文化人類学部長を務めると同時に、同大学哲学科主任でもある。また、「ロシアの学者たち」というサイトには、高等教育機関国際アカデミー準会員、ロシア高等教育機関功労活動家、ロシア高等職業教育名誉活動家としても紹介されている。

紹介者は、2006年10月、劇団東京ノーヴィ・レパートリーシアターが主催する「インスピレーション」をめぐるシンポジウムで初めて出会った。その企画の中心者はスタニスラフスキーの演技論に基づく演出家アニシモフ氏で、アニシモフ氏はチェーホフやツルゲーネフなどロシアの作家の作品の演

出を手がけつつ、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』や近松門左衛門の『曾根崎心中』などを独自の演技論と演出法で上演していた。

ヤーチン教授はアニシモフ氏とは盟友で、さまざまな共同事業・協働活動をしてきている。本年3月末にも、東京両国のシアターXにて、メタ・カルチャーについての国際シンポジウムをヤーチン教授とアニシモフ氏が共同企画して、わたしも参加を要請されている。

アニシモフ氏もヤーチン教授もともに、「こころの未来研究センター」の「こころの未来」という命名や概念・ビジョンに非常に関心を寄せており、「こころの未来」と彼らが論及している「メタ・カルチャー」とが必ずクロスすると考えているようである。そこで、本センターとの協働・協力研究を進めたいという意向を持ち、その一環として、わたしが国立極東技術大学および国立極東大学の文化人類学部に招かれて、「神道と日本文化とロシア文化の接点」について講義する機会を持った(2008年9月29日～10月4日)。

その際、ヤーチン教授が、ロシア語の「こころ(сердце; serdtse)」を日本語の「こころ」と関連づけて研究したいという考えを持っていることを知り、その第一歩の研究論文を同僚の言語学の専門家とともに執筆していただくことになった。それが本論文である。論拠とされている言語学理論はフンボルトやサピア・ウォーフなどのいわゆる言語相対仮説であり、わが国では1970年代ごろに注目された理論であるが、ヤーチン氏らはそれらを新たにメタ・カルチャー論として再編・再構築したい考えのようである。「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」という研究プロジェクトを代表として推進しているわたしは、ヤーチン氏を始め、国内外のさまざまな研究者と交流しつつ共同研究を進めていきたいと考えている。

(「こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究」代表: 鎌田東二記)